

吉雄耕牛翁の肖像なり翁名を永章俗稱幸作初幸在衛門耕牛を其蹄より長崎故の和蘭大通事にして其職業の通譯に於て當時の巨擘
 たる傍り外科の業を好み来船留在の西醫を就き其方術を授け自ら試み人を救ひて遂に亦其技術の名有り尤能き子弟を教導する故に四方より
 笈を員して其門に入者の數十人あり云々毎度江府未聘の使節を以て都下未だ明和の始前野良澤先生長崎より此に就て西學
 の一端を質問し創設して此學の端を發せし後此翁の江戸未だの日前野先生を介して吾鶴齋松田先生を以て其門下の盟を結び
 而して其一二の方術を受く爾後解體新書を譯述するに及び其書は序以翁翁を請ふ今世より翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 在りて一と云吉雄翁の西賓を陪して府下未だの西賓を以て其書は序以翁翁を請ふ今世より翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 主として西書を譯法を授け又時吉雄家の塾出入り其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く
 常景仰も所り其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く
 蘭客を陪し未だ拙撰蘭學措楮を出し示せし翁翁の事及び君等が為り汗顔も所り賞りたる指解體新書此序を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 語の事と與りて未だ拙撰蘭學措楮を出し示せし翁翁の事及び君等が為り汗顔も所り賞りたる指解體新書此序を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 彼邦書を讀み其方法を直に西醫に詰問し其術を研究し此翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 晩年職を辞し薙髪して即ち耕牛を以て隱居の常稱し其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く其方術を受く
 すと云此像を翁翁の末の勤務の中寫生し其面容を見し翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 今又再會し髮髻して新書を教を受く如く當時都下して
 翁翁の交接し人先師を始りて皆已に泉路を趣き即今此
 を鑒定するも翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 業の嗣子權之助永保和蘭進貢の料を齎し未だ面會す即
 此畫を出し示せし翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 其齡六十二歳翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 其篤く西學を長し當時博洽明達の一人なり世に賞譽を所り能
 家聲を振ふと云々嗚呼教年翁翁の肖像を見其年復其
 息男如淵翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 磐水老人茂實月洲の消遣精舎を録す

先師九幸先生八十五翁を以て即世し其遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 年の四忌あり此日今嗣子權之助永保和蘭進貢の料を齎し未だ面會す即
 此畫を出し示せし翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 其齡六十二歳翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 其篤く西學を長し當時博洽明達の一人なり世に賞譽を所り能
 家聲を振ふと云々嗚呼教年翁翁の肖像を見其年復其
 息男如淵翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び
 磐水老人茂實月洲の消遣精舎を録す



此畫は其高風を欲慕するものなり翁翁の遺著を以て翁翁の遺著を以て其門下の盟を結び

唯の死ふの悔悔の言是不可念念の念ふ

過後非心物ふの苟念事時不可破意

於此實不可也房勤勅作ふの再安

廿七不日 十一更 九平

